

---

# 三色すみれ

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三色すみれ

### 【Nコード】

N3697D

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

中学校の演劇部での出し物で主役をやることになった遼平と真琴。つれない態度の真琴に対して遼平が仕掛ける方法とは。シェークスピアの真夏の夜の夢を題材にしました。

## 第一章

### 三色すみれ

この中学校には演劇部がある。部活自体はかなり真面目で熱心である。だがそれが高じてどうにもかなり難しい芝居をする傾向があるようである。

この時の演目はシェークスピアであった。彼の喜劇の中でも有名な作品の一つである『真夏の夜の夢』だ。中学生の演目にしてはや難しいと思えるものであった。

だがそれでも彼等はそれに真面目に取り組む。その真面目さは顧問である杉岡先生をして唸らせて何も言わせない程見事なものであった。

「いや、凄いね」

赤がかった薄い髪でそこそこ端正な顔の杉岡先生は体育館の舞台上でリハーサル等を行っている彼等のその頑張りを見てこう言うだけであった。

「何か俺のやることがないよ。何もなくていいみたいだね」

「何言ってるんですか、先生」

生徒達はそんな先生に対して声をかける。

「先生のやることもありますよ」

「それもかなり」

「あれ、あるんだ」

先生は生徒達からそう言われて顧問の先生としてはどうかと思える言葉を口に出した。

「それ、何かな」

「大道具係ですよ」

「こつちも大変なんですから」

「ああ、そうだったね」

言われてそれに気付く。あまりにもすることがないので忘れてい

たがそれも立派な顧問の仕事である。しない顧問もいるがこの先生は違っていた。

「それがあつたね」

「そうですよ。よかつたら」

「指示出してくれませんか？」

「いやいや、俺だつてさ」

背広の裾をめくつて言う。学校の先生の背広らしく随分くたびれている感じた。だがその背広が結構似合っていたりもするから面白い。

「何かしないといけないし。だから」

「手伝つてくれるんですね」

「助かります」

「皆がいい芝居をして欲しいからね」

先生は笑顔で生徒達に述べる。そうして道具の一つを手取る。

「こつやつて俺もできることを」

「御願います」

「けれど先生」

ここで生徒の一人が先生に言う。

「何かな」

「腰には注意して下さいね」

「ぎつくりなんてことは」

「怖いことを言うなあ」

先生にとつては洒落にならない言葉であつた。先生の歳になるとそれが一番怖いのだ。気をつけていてもなったりするものである。

「それだけは気をつけるから。大丈夫だよ」

それでも気をつけなければならぬのでこつ述べる。

「そうですか。それじゃあ」

「御願いますね」

「うん」

こつして先生は生徒達と一緒に道具の出し入れや整理にあたつた。

そうこうしている間にも芝居の準備は進む。練習もかなり順調であった。

「あの古い月め、何をしているのだ」

シーシアス役の三年の生徒が実際に舞台でリハーサルをしている。制服のまま台本を手に芝居をしている。

「折角の身代を若者の自由にさせないというのか」

「四日は瞬く間に夜の闇に消え」

その横にはヒポリタ役の三年の女の子がいる。やはり制服姿で台本を片手にリハーサルを行っている。

芝居もかなり上手くいつている。だがその中で見えないトラブルも起こっていた。

「何かこんなの嫌だよ」

デイミトリアス役の二年生若田部遼平が文句を言っていた。

「何でデイミトリアスがハーミアを好きなんだよ」

やたらと背の高い少年である。顔は細面でわりかし整っている。脱色しているわけでもないが髪が茶色でそれもよく似合っている感じである。その彼が台本を見て文句を言っているのである。

「やっぱりさ。最初からヘレナが好きな方がいいじゃない」

「何馬鹿を言っている」

その横の黒髪をポニーテールにした小柄な女の子が彼に突っ込みを入れる。目が切れ長でそれが奇麗な印象を与える。実際に小柄ながら大人びた印象の女の子である。

## 第二章

彼女の名を桜森真琴という。遼平のクラスメイトでもある。クラスではしつかり者として知られている。それに対して遼平はお調子者である。

「それでは芝居にならないだろうが」

「そうかなあ」

だが遼平はそれでもお構いなしといった感じであった。

「だってさ。ヘレナは桜森さんじゃない」

「それがどうした」

ジロリと遼平を見上げて言う。かなりきつい視線である。

「だったら最初からそれでいいや、僕はね」

「何が言いたい？」

あらためて遼平に問う。

「そもそも若田部、御前はだな」

「僕は？」

「一つ一つの動作や発言が軽い。男の子というものはもう少し己を重んじてだ」

「別にそんなのどうでもいいや」

しかし遼平はそういったことには一切お構いなしであった。平気な顔である。

「僕はヘレナが好きなんだし」

「ヘレナがか」

「というか桜森さんが」

その軽い調子で言うのだった。

「好きなんだけれど」

「愚かな話だ」

その言葉をすぐにはっさりと切って捨てる真琴であった。

「そんなことを言っても何も起こりはしないぞ」

「あらら、冷たいなあ」

「冷たいも何もだ」

本当にその冷たい態度で言葉を続ける。

「では聞くが私がハーミアだったらどうしたのだ」

「その時はハーミアにさ。夢中に」

「最後までか」

「うん、最後まで」

あっけらかんとした調子で述べた。相も変わらずといった調子で。

「それは駄目なのかな」

「駄目に決まっている。結局何も考えていないのだな」

今度は少し軽蔑する目で遼平を見上げた。視線の鋭さときつさがさらに増している。

「よくそれでシェークスピアをやるうとするものだ」

「シェークスピアはやる気って先生が言ってるじゃない」

杉岡先生がである。つまりは先生の受け売りの言葉である。

「だから僕もいいんだよ」

「それでいいのか」

「うん、全然」

態度はずっと変わらない。

「それに」

「それに？」

「桜森さんだって僕とずっと一緒にいたいんだよね。だから演劇部に」

「それはない」

一言であった。

「それだけは絶対はない。安心しろ」

「またまたそんな」

信じようとしてもしない遼平であった。

「照れ隠しにそんなこと言って」

「御前は人の言ったことが理解できないのか？」

遼平に対して怒った顔を見せた。

「前から思っていたが」

「うっん、わかってるよ」

しかし遼平はへらへらとした様子で真琴に言葉を返す。少なくとも全然反省なぞしてはいないのはその態度でわかることであつた、

「わかつてるけれどさ。桜森さんはわかっていないじゃない」

「私がか」

「そうだよ。ほら、わかっていない」

「一体何のことだ」

真琴は本当に何が言いたいのだ御前は、と顔に書いていた。彼女は嘘がつけない真つ正直な性格である。だから感情もまた顔に出るのである。

「そう言われてもわからないのだが」

「僕はわかつてるからいいよ」

遼平はそのへらへらした顔で軽く述べる。

「真琴さんが僕を好きだつてことがね」

「いい加減にしないと殴るぞ」

半分本気の言葉であつた。

「そんなことばかり言っていると」

「ほら、顔が赤い」

むっとした真琴に対して言う。軽い突っ込みであつた。

「やっぱりそうなんだ。桜森さんは僕のことか」

「あいな、御前はいつもそう言うが」

本気で頭にきてきたので声を荒いものにさせてきた。

「私は御前のそうしたいいい加減なところにいつも」

「あつ、二人共」

ここでライサンダー役の二年の同級生が二人に声をかけてきた。

「何かな」

「何だ？」

二人は同時に彼に顔を向けた。



「そろそろだから。演技に入っ」

「了解」

「わ、わかった」

やはり遼平は軽い返事であり真琴は堅苦しい挨拶になっていた。ここにも二人の個性の違いがはつきりと出ていたのであった。

「それじゃあ。やろうか」

「演技中はふざけるなよ」

「わかってるって。ハーミア、考えなおしてくれ」

遼平はすぐにデイミトリアスになった。見事な変身であった。

「僕の正当な権利を認めてくれ」

「まあ美しいですって？」

そして真琴も。ライサンダーとハーミアのリハーサルの後で自分の役に入る。

「デイミトリアスの心を捉えるのにはどうすればいいの？」

彼女も見事な演技であった。リハーサルだというのにもう本番のようであった。二人は芝居の間は見事にそれぞれの役に入っていた。そしてそれは部活が終わってからでもであった。

「いやあ、お見事お見事」

杉岡先生は大道具を手伝った後で生徒達を前にして彼等を褒めていた。

「俺からは何も言うことがないよ、本当に」

「そうなんですか」

「ああ。この調子でやってくれたらいい」

笑顔で太鼓判を押す。かなり能天気な感じであったが。

「是非な。じゃあ今日はここまでだ」

「はい」

こうして解散となった。真琴は一人で帰ろうとしたがそこに遼平がやって来たのであった。

「待ってよ」

「待つつもりはない」

真琴は横に來た彼に冷たく言い放った。もう辺りは夕暮れも終わりがけで夜の闇が近付いてきていた。家々は黒に近くなっている。空は赤が濃くなり次第に黒くなっていた。何もかもが赤から黒になるうとしている時間であった。

二人はその中を並んで歩いてきた。といつても遼平が無理矢理ついて来ているのであるが。二人の前にあるそれぞれの影はかなり長くなっている。それが消えようとしている夕暮れと街の電灯に照らされていた。

「さつさと帰れ」

「あれ、デートは嫌なんだ」

「断る」

やはりまた一言であった。

「私は男とデートする趣味はない」

「冷たいなあ、っていうか素直じゃないなあ」

「あんな」

今の素直じゃないという言葉に反応して自分の左にいる遼平をむつとした顔で見るのであった。

「どうして御前はそう思うのだ？」

「素直じゃないのは本当じゃない」

しかしそれでも遼平は言う。

「本当はデートできて嬉しい癖に」

「勝手に人の気持ちを捏造するな」

そう遼平に対して言う。それと同時に彼の少し着崩した青い詰襟を見る。対する真琴の服はスカートの丈までも端整に着られた黒とエンジ色のセーラーであった。この学校の制服である。

「全く。服装もいい加減なら言葉もいい加減だな」

「そうかな」

遼平はその言葉にとぼける。

「僕は普通だよ」

「そのだらしない格好でか」

「うん」

あっけらかんと答える。

「少しふざけてるだけで」

「そのふざけているのが駄目なんだ。そもそも部活の時もだな」

「真面目にやってたよ」

しかし彼はこう言い返す。

「やる時はね。そうじゃないの？」

「それはそうだな」

悔しいがそれは認めるしかなかった。彼女にとっては残念なことに。そうして電灯に少しだけ照らされている彼の顔を見上げるのだ。  
った。

### 第三章

「一つ褒めてやる」

「何を？」

「あのディミトリアスの演技だ」

その今やっている芝居の彼の役である。

「見事だ。何も落ち度もない」

「桜森さんにそう言われると嬉しいね」

「だがそれだけだ」

そのうえでこうも言うのであった。

「他は全然駄目だ」

「あれっ、そうかなあ」

「何を褒めろというんだ」

あまりにもきつい言葉であった。

「御前に対して」

「それじゃあさ」

それはそれで。遼平はめげない。めげないでこう言うてきた。

「その練習する？」

「練習か」

「うん。もっと上手くなる為にさ」

そう言いながら自分の鞆から脚本を出してきた。言うまでもなく

真夏の夜の夢の脚本であった。

「下校中でも。どうかな」

「いい心掛けだな」

彼女もそれを受けることにした。それで自分も鞆から脚本を出したのであった。

「では。はじめるか」

「うん。それじゃあ」

彼はすぐに芝居に入った。そうになると真剣であった。

「僕が優しい言葉をかけたことがあるかい？」

「そう言われれば言われる程貴方が好きになるの」

真琴もまた。完全にディミトリアスとヘレナになりきっていた。

「君を猛獣の餌食にさせてやる」

「どんな猛獣だって貴方程冷たくはないわ」

身振り手振りを交えながら下校中も芝居をする。その時二人は完全に演劇の中の恋人同士になっていた。当然真琴も。その時彼女はヘレナの目で遼平を見ていた。しかし自分ではそれに気付かないのであった。

公開前日の実際の衣装を着てのリハーサル。この時も二人はディミトリアスとヘレナになっていた。体育館の隅で衣装を着て事前の二人だけの打ち合わせと練習をしていた。

「ここはどうだな」

「うん」

ディミトリアスの服を着た遼平はヘレナの服の真琴の言葉に頷いていた。互いに立って向かい合いながら言葉を続けていた。

「そしてだ。ここは」

「こうだね」

ここで遼平は少し身振りを入れた。

「それでいいんだよね」

「その通りだ」

その遼平に対して告げる。

「いいではないか」

「やっぱり相手がしっかりしているからね」

「お世辞はよせ」

やはりクールなまままでの言葉であった。

「御前の方がずっと上手だ。私は御前のレベルに達しようと必死なのだ」

「またまたそんな」

「それは事実だ。私もまだまだ努力が必要だ」

「じゃさ。今日も頑張ろうよ」

「わかった」

遼平の言葉に頷いてそのまま演技に入る。その謙遜の言葉とは裏腹にその演技は遼平に勝るとも劣らないものであった。杉岡先生もそれを見て思わず感嘆の声をあげた。

「いや、凄いね二人共」

「そうですよね」

その先生の側にいた大道具係の一人がそれに同意して頷く。彼もまた端役で参加している。部員の人数の関係で大道具係とはいっても芝居に参加するのである。

「演技に熱が入っていますし」

「それに抜群に上手いね」

先生は感心した顔で笑顔で頷いていた。

「どうやらあの二人が芝居の軸になるね」

「そんなにですか」

「そうだ、間違いなくね」

その結構広い額に笑みの皺を浮かべさせての言葉であった。

「これからが楽しみになってきたよ」

「ですね」

「うん」

先生はそんな調子であった。確かに二人の演技には期待して熟知していたがそれでも二人の内幕は知らなかった。知らなかったというよりも気付かなかった。もつともそれに気付いていないのは先生だけでなく部活の全員であったのだが。皆芝居の準備や演技に熱中していて彼等のことには全く気付いてはいないのであった。迂闊と言えば迂闊であった。

## 第四章

リハーサルは大成功に終わった。リハーサルといえどその出来は素晴らしいものであり満足のいくものであった。その二人もそれ自体には満足していた。というよりは真琴も、である。

真琴はリハーサルが自分なりにでも満足がいったことに気分を充実させていた。そうしてその気持ちのまま家に帰った。だが家に帰っても練習を続けるのであった。

「御願いだから時間を縮めて」

制服を脱いで私服に着替える。部屋は質素で何もない自分の部屋だがそれでも舞台をイメージして練習をするのであった。

「眠りよ。悲しみの眼を閉ざしてくれる優しい眠りよ」

もう台本を手にしてはいない。台詞は全部覚えている。そのままの言葉だった。そうして一人で芝居を続ける。だがその目の前には相手がいた。

「あいつもやっている」

これは心の中での言葉であった。

「だから私も」

彼女は無意識のうちに遼平を意識していた。しかしそれには気付いていない。そうしてそのまま本番へと入るのであった。

本番の最初の日。舞台の前は生徒や先生達でごったがえしていた。演劇部の芝居は学校の中ではかなりの評判であるのだ。だから人気も高かった。

「先生、今回の自信の程は」

「如何でしょうか」

新聞部の面々が杉岡先生にインタビューをする。これはいつものことでありいささか儀礼的なものがある。しかし先生は笑顔でそれに応えるのであった。

「それは生徒達に聞いて欲しいね」

自信に満ちた笑顔であつた。新聞部の面々もそれを受け取る。

「是非共ね」

「是非共、ですか」

「そうさ」

また笑顔で述べる。

「彼等が演じるんだからね。俺ではないんだよ」

「では先生から見てですね」

彼等はそれを受けて話題の振り方を変えてきたのであつた。

「今回の出来は。どうですか」

「それは見てのお楽しみだね」

その自信に満ちた笑みでの言葉であつた。

「是非共ね。見て欲しいな」

「わかりました」

後でこのインタヴューは自信に満ちた予言となるのであつた。それだけの出来だったということである。その芝居がいよいよはじまるのであつた。

皆ははじめから見事な演技であつた。とりわけ遼平と真琴が。彼等は完全にデイミトリアスとヘレナになりきって芝居をしていたのであつた。

「デイミトリアス待つて」

「行けつて言つてるじゃないか」

完全に彼を慕う少女とそれを拒む若者であつた。ギリシアの服を着た二人は真剣な顔で演技をしている。その熱は観客達にも伝わっていた。

「凄いわね」

「ああ」

誰もがその演技を見て話す。

「前から上手い二人だったけれど」

「今日は特に」

「僕の真心がわかっていない癖に」



ここでデイミトリアスの言葉が出た。

「僕の愛に比べれば彼のそれなんて問題にはならない」

「ひどいわ、ひどいわこの嘔吐き」

そしてヘレナの言葉が。完全に二人が主役であった。

「何か主役になってない？」

「そうなるよね」

また観客達がひそひそと話をする。

「凄い演技だよ」

「何か別格」

誰もがそう見ていた。そしてその中で芝居は佳境に入っていく。

それと共に二人の芝居はさらに熱を帯び最早完全に周りをその中に引き込んでしまっていた。

「あれ程ハーミヤを思い詰めていた心が急に淡雪のように消えてしまい」

その場面ではヘレナを演じている真琴をじっと見ていた。

「何時までも見飽きぬのはヘレナだけでございます」

真琴もそれはまた同じであった。じっと遼平を見詰めている。そ

うして言うのだった。

「デイミトリアスという宝を拾ったけれど」

その琥珀の目を彼から離しはしない。ヘレナとして語る。

「私のものと言われてもまだ信じられませんか」

「僕達は本当に目が覚めているのだろうか」

遼平はその言葉を受けて言う。

「何かまだ寝ていて夢を見ているようだ」

じっと見詰め合い話をしている。そんな二人を見て彼等のクラス

メイト達は言うのだった。

「あの二人まさか」

「かなり怪しいわね」

そう観客席でヒソヒソと話をするのであった。

「顔が完全に真剣じゃない」

「あれっってお芝居でしょ？」

「どうだか」

女の子の一人がそれに異議を呈する。

「それも怪しいわよ」

「けれどさ、あれって」

「ねえ」

ここで皆遼平を見るのであった。

「若田部の奴が一人騒いでるだけで」

「そうなんじゃないの？」

「甘いわね」

しかしその言葉にはこう答えが返って来た。

「それもバナライスより甘いわよ」

「そうかしら」

「しかもトッピングやり放題した時よりも甘いわ」

また随分胸焼けしそうな例えである。少なくともシェークスピアの時代にはない例えだ。もっとも何かと大袈裟な表現の好きなシェークスピアであるからアイスクリームを知っていれば使っていたかも知れないが。

## 第五章

「いい、そもそもね」

「ええ」

皆その女の子の話を聞く。彼女は大真面目な顔で皆に対して講義をするのであった。

「本当に嫌なら真琴だって完全に避けるでしょ。違う」

「そういえばそうね」

「あいつ何だかんだ言っつていつも避けていないわよね」

「そこよ」

彼女はそこを指摘した。

「そこなのよ。そういうのを見ているとね」

「元々まんざらじゃなかった。そうね」

「そういうこと。さて、こっからよ」

彼女はその顔を舞台に戻して言う。もうすぐ終わりであった。

「あの二人がどうなるかね」

「かける？」

「勿論」

クラスメイト達は自然とそんな話になっていた。皆随分乗り気である。かなり楽しんでいるのがその様子からもわかる。気楽と言えば気楽である。

「若田部がやるところぜ」

男のうちの一人の予想であった。

「ここはさ」

「オーソドックスな予想ね」

女の一人がその予想に笑う。

「そう上手くいくかしら」

「あの桜森だぜ」

真琴の頑なさというかあの堅苦しさはクラスの皆が知っているこ

とであつた。それもあつて皆楽しそうに今後を見ているのである。

「自分からは仕掛けないさ」

「どうかしら。それはわからないわよ」

見れば女は殆どが真琴が動くと言つのであつた。

「その辺りは」

「若田部に決まつてるじゃねえか」

しかし男は遼平を推す。

「あいつの性格だったらな」

「それは最後までわからないわよ」

「そうよ、カーテンコールまでね」

女組はそう言つて余裕を見せるのであつた。何はともあれ舞台は今終わった。オベローンやティターニア、パックの役者達が最後の口上をして見事舞台は幕を降ろした。皆の拍手の中で役者達が出て来る。まずは笑顔で皆揃つてである。

見れば遼平と真琴はその中で二人並んでいた。その手をつなぎ合つている。

「あの手見て」

「ああ」

クラスメイト達は二人の手に注目した。

「どっちが握つてるかしら」

「若田部だな」

一人がそれを見て言う。

「ほら、見る」

「そうね」

「確かに」

皆もそれを見る。見れば確かに遼平が若菜の手を握っているのだつた。

「これで決まりだよな」

「なあ」

男達は彼が自分から手を握っているのを見て誇らしげに女達を見

る。

「若田部だぜ？やっぱりなあ」

「賭けに勝ったらラーメンかハンバーガーな」

「くっ」

「まずいかも、これって」

「だから最後まで見なさいって」

しかし女組のリーダー格はあえてこう言うのであった。随分強気に。

「カーテンコールまでわからないって言ってるでしょ」

「もう勝負ついてるのにかよ」

「諦め悪くないか、それって」

「残念だけれど違うわ」

彼女は腕を組んで平然とこう男組に返した。

「だってまだ最後じゃないでしょ」

「まだ言うのかよ」

「強気だねえ、全く」

「女は強気でいかなくちゃ」

ある意味真琴よりも気が強いと言えた。それがあまりにもはつきりとわかるので男組から見ても引くものがあつた。だが女組はそんな彼女に元気付けられた。

「そうよね、まだ」

「カーテンコールがあつたわよね」

それに勇気付けられる。そうして言うのだった。

「最後まで見ましょう」

「そうね」

「どうなんだか」

「まあいいんじゃない？」

男組も強気だった。だからこそ今はそんな彼女達の言葉を笑顔で受けるのであつた。

「ここはさ。大きく」

「構えていればいいか」

「そうよ。勝ち負けは抜きにしてね」

また女組のリーダー格が述べる。

「どんと見ていればいいのよ。ただし」

「ただし？」

「何だよ」

男組は自分達に顔を向けてきた彼女に対して問う。見ればその顔はそれまでの強気な様子に加えて何かを物欲しげな笑みがあつた。

「負けた時は。わかつているわね」

「ハンバーカーかラーメンかよ」

「私はビッグマックだから」

そのうえで事前に注文する。

「いいわね」

「おい、一番高いのかよ」

「そりゃねえぞ、おい」

「勝つんでしょ？ だったらいいじゃない」

しかし彼女はその笑みで男達に言い返すだけであつた。

「あんた達が勝つんだつたらね」

「・・・そうか」

「じゃあまあいいか」

「そういうことよ」

話はそれでまとまつた。

「わかつたらね。最後まで見ましょう」

「ああ、わかつた」

「それじゃあな」

彼等は舞台に目を戻した。揃つての最後の挨拶が終わり後は役者それぞれのカーテンコールであつた。主役のオペローン達のものが終わりライサンダーとハーミアのも終わった。彼等のそれは普通に終わった。それからいいよいであつた。

「いいよいね」

「ああ」

クラスの皆は固唾を飲む。遂にその二人が姿を現わした。

「出たわ」

「さあ、何が起こるか」

皆何が起こるか見守る。二人は舞台のカーテンの前だ。だがそこでは手をつないではないなかった。

二人並んで皆の前に出て来る。そうしてまずは一礼するのだった。

「上手くいったね」

「そうだな」

二人は皆の拍手を受けながら言い合う。そこで遼平はそつと自分の手を真琴の手に近付けた。だがそれは真琴によって止められてしまった。

## 第六章

「今度は駄目だ」

「えっ!？」

「駄目だと言っている」

いつもの厳しい声で彼に告げるのであった。

「何で、さっきは」

「いいから駄目だ」

また彼に言う。

「わかったな」

「何で？」

「さっきは御前から来たな」

彼を見ていた。その厳しい目で。

「御前からな。覚えているな」

「だって。あの時は」

「いいから聞け」

声が一段と厳しくなった。拍手の中で話を続けるのであった。

「私の話を。いいか」

「あつ、うん」

その厳しさに負ける形で頷く。ここでは真琴の勝ちであった。

「私はな。やられたらやり返す」

「やり返すって？」

「そうだ、やり返すのだ」

またそれを告げる。

「それも何倍にしてもな」

「あのさ」

何かえらい剣幕なので遼平は内心戸惑っていた。それでまた言うのだった。

「僕手を握っただけだけれど」



「それだ」

真琴はそこを指摘してきた。

「あの時私は何も言わなかったな」

「オッケーだったんだよね」

「ま、まあそうだ」

何故かここで顔を赤くさせる真琴であった。遼平はその顔が妙に可愛らしく思えたのだがそれについて軽口を言う前に真琴が言ってきたのだった。

「ただしだ。ただではない」

「あつ、そうだったんだ」

「それなりの見返りはしてもらってからな」  
顔を赤くさせたまま彼に言ってきた。

「その覚悟はできているのだろうな」

「覚悟つて。何が？」

「とぼけるな」

その赤い顔で彼に言う。

「手を握ったんだ。その見返りは」

「ソフトクリームとか？」

真琴の好物なのは知っている。こう見えても女の子らしく甘いものが好きな真琴であった。実はソフトクリームは遼平も好物だったりする。

「それなら」

「違う、馬鹿」

今度は馬鹿ときた。

「わからないのか？手を握られたら」

「ソフトじゃないとしたら」

少しわからなくなった。そもそもこのソフトというもののすら特に根拠のないものである。しかしそれでも彼は根拠なくそれだと思っていたのである。

「何かな」

「いいか？」

わからない彼に対して言うのだった。

「それはだな。その」

「うん。何？」

「これだ」

いきなり攻撃を仕掛けてきた真琴であった。その攻撃とは。

彼に抱きついてきたのだ。その小さな身体を思いきり伸ばして彼の首の自分の両手を巻きつけてきたのであった。足がもう完全に爪先立ちになっていた。

「えっ！？」

「これだ。そのお返しは」

そう彼の耳元で囁く。遼平は目が点になったが驚いたのは観客達であった。

「なっ！？」

「あの桜森がかよ」

思わずこう叫んだ二年もいた。二年の間では真琴といえどもこんなことは絶対に有り得ないキャラクターで通っていたからこれも無理のないことであった。

「何てこった」

「マジかよ」

「わかったな」

真琴は遼平の耳元でまた囁いた。遼平は少し我に返ってそれを聞いていた。

「私だってな。ヘレナだったんだぞ」

「うん」

それはわかっている。それで遼平はディミトリアスだ。

「わかってるけれど、それは」

「だったらだ。わかるな」

また彼に言う。

「私も。あの三色のすみれの魔法で」

「あれっ!？」

「ここで遼平はあることにふと気付いた。

「三色すみれだよね」

「そうだ」

劇の中で出て来る魔法の花だ。妖精達が恋の魔法に使う花でありこれを眠っている恋人達の目にかけて恋の病に陥らせるのである。これでディミトリアスはヘレナの虜になるのである。

「それがどうしたんだ？」

「あれって確か」

「少しずつ我に返って記憶を辿りながら言う。」

「ディミトリアスとライサンダーにかけるもので」

「うっ」

真琴は彼の言葉に声を詰まらせた。実はこの魔法は最初妖精パツクの手違いでディミトリアスもライサンダーもヘレナを愛するようになるのだ。ライサンダーは本来の恋人ハーミアを忘れてしまう。後でそれを怒った妖精王オベローンが眠った彼等達にまた魔法をかけさせて本来の形にするのである。当然ながら遼平も真琴もそれを知っている。知らない筈のないことである筈だった。

## 第七章

「ヘレナは」

「それはあれだ」

抱きついたまま顔を背ける真琴であつた。

「間違いで私にもかかったただけだ」

「そうだったの」

「そうだ。そうしておけ」

そう彼に告げる。

「わかったな」

「うん、わかったよ。それじゃあそれで」

「納得しろ」

強引だがこれで話はまとまつた。しかし観客席は騒然であつた。

「幾ら何でもこれは」

「問題では？」

先生達が舞台の上で抱きつく二人を見て言いはじめたのであつた。

「堂々とこんなことは」

「やはりこれは」

「いや、見事な演出だね」

ところがここで杉岡先生が言うのであつた。顔に焦りが見られるがそれでも必死に二人のフォローに回るのであつた。

「カーテンコールでもこんなのを見せてくれるなんて。シェークスピアをよくわかつているな」

「あれっ、これって」

「演出だつたんですか」

「その通りですよ」

そう他の先生にも言う。

「いや、舞台はカーテンコールの間も続きます」

その通りである。舞台は幕が降りて終わりかというところではな

いのだ。カーテンコールもまた舞台なのだ。オペラにおいてはとりわけそうである。先生はそれで誤魔化しにかかったのであった。

「ですからこうした演出をしたのです」

「そういえばディミトリアスとハーミアですな」

「そう、恋人同士です」

これまた強引なこじつけであつた。先生はとにかく必死にこの場を取り繕いにかかつていた。

「ですから。こういうこともまた」

「あるのだと」

「恋人同士に相応しい演出でしょう？」

そのまま押し切りにかかった。

「ですから問題はないのです」

「演出ですか」

「その通り」

また強引に主張する。

「ですから。御安心を」

「ふむ。顧問の方が仰るのなら」

「そうなのでしょうな」

先生達もまずはこれで納得するのであつた。内心いぶかしむものが多分にあつたとしても。

「それではそういうことで」

「ここはいいですな」

「そう御理解して頂けると何よりです」

失言だがここでは誰もそれに気付かないのが幸運であつた。

「芸術ですから」

「芸術ですか」

「そうです」

それでも何でも許される。ある意味非常に有り難いものである。

「ですから。あの二人の演出なので」

「わかりました」

先生達はやつと完全に納得したようであつた。

「それではこの件は何もなしということだ」

「ええ。そういうことで」

先生達は何とか杉岡先生が抑えきつた。しかし杉岡先生にとってはまことに心臓に悪い、ヒヤヒヤとする事態であつた。

（全く）

先生は舞台の二人を見ながら心の中で呟く。見ればまだ抱き合つたままだ。というよりは真琴が遼平に抱きついたままなのであつた。（骨が折れるな、こんな所まで）

だが悪い気はしていない先生であつた。別に二人を叱る気もなかつた。何故なら全ては真夏の夜の夢のことであるからだ。シェークスピアの魔法のせいだからだ。

「さて、と」

二人のクラスの女の子達は得意満面であつた。

「これでいいわよね」

「ハンバーガーね」

「それかラーメン」

「ちえっ」

男達は彼女達のにこやかな顔を見て思わず悪態をついた。

「何でこんなことになるんだよ」

「幾ら何でも有り得ないんだろ」

「悪いけれどこれが現実なのよ」

例の中心人物もまた誇らしげであつた。その顔で男組に告げる。

「もうちよつと女を勉強しなさいって」

「勉強してわかるものかよ、これって」

「センスも必要ね」

彼女はいささか難しいことを述べてみせるのだつた。

「センスがないと女つてのはわからないわよ」

「何だ、それって」

「滅茶苦茶じゃねえか」

男達はそれを聞いてまた悪態をつく。

「それで負けるなんてよ」

「何か腑に落ちないな」

「けれど負けは負けよ」

「そうよ。観念しなさい」

女組はそんな彼等に対して上機嫌で言い返す。実に気楽なのは彼女達がおごつてもらう立場だからである。実に簡単な話であった。

## 第八章

「わかつたらね」

「どっちがいいの？」

「どっちでもいいさ」

男組はそう彼女達に述べた。

「どうせよ、おごるんだったら」

「何でもいいさ」

「センスあるじゃない」

その中心人物は彼等の潔さを見てそう言うのだった。

「これがセンスなのかよ」

「そうよ。センスつてのは潔さも重要なのよ」

こう主張してみせる。

「わかつたかしら」

「何か適当なこと言つてねえか？」

「なあ」

少なくとも男組にはそう聞こえる。そしてそれは正解だった。

「結局あれだろ？女の子にいいムードにできるかどうか」

「それだけだよな」

「何だ、わかつてるじゃない」

しかも女組も堂々とそれを認めるのであった。開き直りに近い。

「わかつていたら勉強する」

「そしてその前にね」

「わかつてるさ」

「じゃあ好きなの選べよ」

そう女組に言葉を言い返す。

「どんなのもいいからよ」

「ただしラーメンかハンバーガーだけな」

「それじゃあチャーシュー麺ね」



「私はダブルマック」

女組もそれを受けて好き勝手に言い出す。実に心地よい笑顔で。

「私はわかってるわよね」

「ああ、当然な」

「ビックマックだろ」

男達はその昌子に対して言うのだった。

「全くよお」

「一番高くつくな」

「あら、授業料と思えば安いものよ」

昭子はしれつとして述べる。

「これ位ね」

「そうよねえ」

「安くついて感謝しなさい」

女組はまたしてもここぞとばかりに言う。やはりかなり勝手な調子である。

「ああ、わかったら」

「放課後ね」

「やれやれだぜ」

「シェークスピアの言う通りだな」

誰かが言ったがシェークスピアは何かと女性というものに対して勝手なことを書いている。それを知っているからこそその皮肉まいた言葉であった。

だがその間も遼平と真琴は抱き合っている。というよりは真琴がずっと遼平を抱き締めたままなのであった。

遼平はそんな真琴に対して言った。

「あのさ」

「何だ？」

真琴はその彼に応えてきた。

「何か用か」

「何時までこうしているの？」

彼はそう真琴に問うた。

「何時までとは。何がだ？」

「だからさ」

遼平は彼女の言葉を受けてまた言う。

「こうして抱き合っているの。何時までなの？」

「暫くの間だ」

真琴はそう述べた。

「わかったな、暫くの間だけだ」

「けれどさ。その暫くって」

遼平はまた彼女に言い返す。

「何時までなのかな」

「それを聞きたいのか」

「だって」

遼平の声がかなり弱ったものになっていた。

## 第九章

「カーテンコールにしてもずっと長いしき。それに」  
「それに？」

「拍手はもうとつくに終わってるよ」

「こう彼女に言う。」

「もうずっと前に。それでもなの？」

「気にするな」

「だが真琴はそれでも強引に彼の言葉を突っぱね続ける。」

「些細なことだ」

「些細なことって」

「だから聞け」

「少し戸惑う遼平に対してかなり強制的に言葉を叩き付ける。」

「私がこうして自分から抱きついているのだぞ」

「うん」

「自分でも自覚はあった。見ればその顔が赤くなっている。」

「だからだ。感謝してだな」

「感謝って」

「女が自分からこんなことをしているんだ」

「顔を赤くさせたまままた告げる。」

「だからだ。多くは言えないが」

「多くはって」

「とにかくだ。もう暫くこのままでいさせろ。いいな」

「わかったよ」

「遼平も笑顔になった。そうしてやっとそれを受け入れるのだった。しかしそれだけではない。ここで彼は反撃に出た。」

「けれどさ」

「何だ？」

「ここで終わりなの？」

そう彼女に問う。

「ここでは？」

「だからさ。このカーテンコールだけで終わりじゃないよね」  
また彼女に問うてきた。

「それはないよね」

「あの三色すみれは」

真琴は彼の言葉を聞いてまた舞台のことを持ち出してきた。

「ずっと効果が続くのだったな」

「うん」

彼は真琴のその言葉に頷いてみせた。笑顔で。

「そうだけれど」

「じゃあ。そういうことだ」

それが彼女の答えであった。

「そういうことって。それじゃあ」

「あの魔法が効くのは御前だけではない」

あまり、いや到底素直ではない言葉を告げる。

「私もだ。わかったな」

「わかったよ。それじゃあさ」

ここで遼平はまた調子に乗るのだった。

「この後デートしない？」

「デートだと」

「うん、何時までもここでこうしているわけにはいかないし」

いい加減もうかなり抱きついたままだ。それは真琴もわかっていて。もっともわかっていてやっているのであるからそれがかなり悪

質と言えば悪質なのだが。

「だからさ。続きはデートで」

「デートだと」

真琴の目がむっとした。同時に剣呑な光を発する。

「御前はそれが望みか」

「うん。駄目かな」

遼平はまた真琴に問う。

「駄目だったらいけないけれど」

「駄目とは言わない」

やはり強い、硬質の口調で述べてきた。

「悪くはない」

「それじゃあ」

「ただしだ。いいか」

そのうえでまた言ってきた。真琴はやつと彼から離れて、それから言うのだった。

「私にも都合やしたいことがあるのを忘れるな」

「したいことつて？」

「ヘレナと同じだ」

芝居に話を戻す。またしても。

「純真に、そのだ」

顔がまたしても赤くなる。そうして横目で遼平を見上げながら述べる。

「こうしたことを楽しみたいのだからな。いいな」

「わかったよ。それじゃあ」

遼平はにこりと笑って。そうして真琴に告げた。

「舞台でのディミトリアスとヘレナの続きはデートで」

「そうだ」

真琴は彼のその言葉に頷く。

「それでいい。わかったな」

「わかったよ。じゃあヘレナ」

カーテンコールだが杉岡先生の言葉通りかまだディミトリアスであつた。

「これから宜しくね」

「ええ、ディミトリアス」

真琴もそれを受けてヘレナになり。そうして応える。  
「二人でずつとね」

こうして三色すみれの魔法を言い訳にしてかしくないか二人の仲が  
はじまったのであった。シェークスピアの魔法が今でも結ばれそう  
にもないカップルを見事結ばせた、楽しく不思議な魔法と妖精の劇  
の。そうした些細な話であった。

三色すみれ

完

2007・10・28

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3697d/>

---

三色すみれ

2010年10月8日15時06分発行